

第三節 「御敵」初雁五郎の狼藉

鎌倉幕府は元弘三年（一一三三）に崩壊し、直ちに建武新政府が成立した。南北朝の内乱期をへて足利氏が権力をにぎる室町時代へと移っていく。南北朝内乱期、幕府が鎌倉から室町にうつり権力

者が執権北条氏から將軍家である足利氏にかわった、単純な権力の移動に過ぎないようにもみえるが、政治史だけではなく社会や文化も含めて時代を大きく分ける転換点となったのである。全国的にみれば、生産力が高く荘園が発達した畿内地方を中心として、荘官クラスの地侍が鎌倉末期には「悪党」と呼ばれて独自の行動を強めており体制を揺がす原動力となっていた。甲斐国のように極めて家父長制的関係の強い地方でも水面下では事情はおなじであった。かれらの行動原理は、従来の惣領制的な秩序や權威をとりあえず否定するところにあった。幕府瓦解から新政府の成立へという過程もこの流れのなかで噴出したのである。

建武四年（一一三三）「御敵」初雁五郎というものが、柏尾山（大善寺）を炎上せしめた。室町幕府は將軍御祈禱のため同寺再建の料を寄進している。初雁（狩）五郎はこの史料に登場するのみなので前後の事情は類推していいくしかない。おそらくは、波加利庄の下級荘官であったのだろうが『甲斐国志』に（大月市域）下初狩村に「河内屋敷跡」という城館跡地名がある、と伝える程度である。史料は御敵といっている。初雁五郎は南朝方に加わって活動しているのである。大善寺は先に述べたように古代の旧国造三枝氏所縁の寺である。壇越の消長とは別に平安期の薬師三尊像を守って長く峽東の大寺であった。度々の炎上でもその都度に再建され、鎌倉末期の火

災のときには幕府が同寺の再建のために信濃国に一國平均の国役を課しているほど重要な位置付けをもっていた。残存の史料からはお薬師信仰の隆盛がうかがえる程度であるが、郡内地方のしかも無名の地侍が押し出して同寺破壊に及んだ状況のなかに根本的な歴史の変動が読み取れるのである。なお波加利庄は南北朝期には長講堂領荘園として機能しており、北朝の崇光天皇の即位にあたって公事を申し付けられている。請所も承久の時と同じ武田・島津となっている。

この寄進状の発給者である斯波家長は関東管領として足利尊氏の代理人的立場にあったが、尊氏が征夷大將軍に任官するのは実際はこの翌年であった。尊氏は一方で鎌倉時代の由緒の如何を問わずより多くの武士を徵募しなければならぬし、他方では幕府を潜称ではなく公権力として天下に認知させることに腐心している。一〇月には全国的に武士方の占領した寺社・国衙領の返還を命じたりもしている、権力の帰趨は未定の時期である。甲斐国でも事情は同じであった。幕府崩壊時点での守護は武田（石和）三郎政義だった。後世の通説からみれば奇妙なことであるが、鎌倉時代の甲斐国守護が（史料母数が少ないことを考慮しても）武田氏の独占とはいえない。この政義は幕府草創期ののぞけば初めて確認できる唯一の武田氏守護なのである。甲斐国の政治的寺院としてだれもが連想する恵林寺の創建に関わるのが幕府官僚二階堂氏であることはよく知られていることである。高貴な血筋としての（石和御厨に依る）武田姓は尊とばれたものであろう。しかしこの惣領家のながれの中から自立出来る武士は独立した御家人として安芸や若狭の守護家となっていっている。残った者が甲斐国守護になるような武田氏専制体制ではなかったようである。一見矛盾するようであるが幕末期になって中央で北条氏の得宗専制という本家筋へ求心する動きがあるが、地方でも武士団内部の惣領制の解体過程が、ひるがえってだれもが納得するものへの求心性を同時に産んでいった過程があるのではないのか。さらに国とか守護とかについても新

しい秩序のための紐帶的存在として、新しい位置づけが下からの要求で生まれていったのではないだろうか。武田政義は、後醍醐天皇を討つべく編成された幕府軍に「一族ならびに甲斐国」を率いて参軍している。ついで登場したときは建武新政府側の笠懸かさかけというセレモニーの場であった（『建武年間記』）。次には尊氏方に従軍して諏訪攻めに参加している。かれは決して特別な動き方をした武士ではなかった。政義は結局のところ時流に負けてしまっただけであらう。そして、甲斐国守護は鎌倉中期から安芸国守護家として独立していた武田信時の子孫である信武が安芸守護と兼ねて任じられた。彼の守護着任は、武田氏族全体に対して与えられたものというよりは守護領国制ともいわれる時代にむかって進んでいくこの時に、西国における足利方の有力な武将となっていた武田信武が独自に獲得した恩賞の職ではなかったのだろうか。まったくの新入りとはいわないが、上の事情を考慮して議論すべきであらう。遺された数少ない史料の中に観応三年（二五）に甲斐国青沼郷の下地を地付きとおもわれる逸見入道へみからとりあげて安芸の武士である金子信泰に与える沙汰状がのこっている。この間にも上のようになり行きが窺えるのではあるまいか。文安四年（二五）になっても守護信春にたいしては「国中（くにじゅう）の御敵が乱入」してきたので、大善寺に陣取って退治した、という。初雁五郎についても南北いずれに付いたかではなく、「自由の濫暴らんぼう」と呼ばれた悪党にも似た地侍・甲乙人・殿原とのぼち・親方など様々に呼ばれた人々の、その振る舞いに目を向けて位置づけておこう。